

在日社会が直面する諸問題の解決に少しでも貢献したい

民族教育と在日コリアン若者世代のアイデンティティ形成の関係性に焦点

「ハーフ」表現に拒否感はない
私は日本人の父と韓国人の母をもった、いわゆる「日韓ハーフ」である。よく「ハーフ」という言葉は非人道的であるという主張を耳にするが、当事者である私としては何も拒否感を感じられないし、何よりも言い慣れていることもあり、今回は自ら「ハーフ」と名乗らせていただきたい。このエッセイは、日韓ハーフとして生きる人生がアイデンティティの形成にどのように影響を与えたのか、また、アイデンティティが幾つかの段階を経て変遷された果てに、現在はどういう使命や夢を持っているのかについて論じてみようと思う。なお、今回は、学術的分野や世論で唱えられるような道徳性や是非とは一旦離れて、私自身の経験と感覚のみに依拠して意見を綴っていく。また、決して私の意見を一般論に昇華させる意図はないことをご了承ください。

まず、日韓ハーフとしてのアイデンティティを論ずる前に、「ハーフ」の概念について整理したい。一般的に認識されている「ハーフ」とは、異なる国籍や血統や文化を持つ両親のもとに生まれた人といったところであろうか。日本において「ハーフ」の用語自体はかなり普及したように思われるが、実際のところ、日常生活ではあまり耳にしない。その代わり、「ハーフ」に該当する人のルーツのうち、どちらか一方の国をとって「〇人」と規定し、単一な出生背景を持った人として付き合いなおすような動きが多く見られる。一見、その動きは抑圧的なもののように見えるが、意外と当事者の中でも同じことが起こっている。つまり、たとえ自身のルーツは多元的であってもどちらか一方のルーツの方に情が行き、その情が自身のアイデンティティとして形作られるようになるということである。

投稿

「日韓ハーフ」としてのアイデンティティと夢



東京大学 人文社会系研究科
韓国朝鮮文化研究専攻 修士課程／
コリアンワールド記者

中川 咲恵
(23)

韓国人としてのアイデンティティがはるかに強い

正直なところ、複雑な出生背景を持つ人に「なに人ですか」と尋ねること自体が面白おかしいことではあるが、私もこれまで数え切れないほどのような質問を受けた経験がある。私の場合、そのような問いに対して口では「日本と韓国のハーフです」と答えるものの、内心では韓国人としてのアイデンティティがはるかに強く根付いていた。なぜ私が「韓国人」にこだわっているのか、その根拠はまだまだはっきりしていない。一つだけ言えるのは、韓国で生まれたという事実と家庭内で韓国語を話しているという家庭環境が強く作用したということである。しかし、今振り返ると、それらの要因以外に、これまでの人生で経験した出来事や環境によって韓国人としてのアイデンティティが形作られ強調された局面があるように思う。それでは、恐縮ながらも、ここからは私自身のこれまでの人生とアイデンティティ形成の過程について振り返らせて頂き、日韓ハーフとして生きる人生がアイデンティティ形成に及ぼす影響についてかいつまんでいこうと思う。

韓国ソウルで生まれ7歳まで暮らす

私は韓国・ソウルで生まれ、7才まで韓国で暮らした。もちろん、家庭内でも韓国語と韓国文化だけの世界だった。その後、父の仕事の関係により家族全員で日本に移住し、私は公立小学校に入学した。当初は日本語が全くわからなかったため、小学校の放課後に日本語学校に通うという特殊な生活を送っていた。小学校側は日本に来たばかりの私に対して非常に繊細な配慮を施してくれた。例えば、先生が日本での生活で何かつらいことはないかと声をかけてくれたり、クラスメイトが一齐に授業を受ける裏で私一人だけの教室で日本語の授業を受けたたり、韓国人の母を講師に迎えて韓国文化講座の特別授業を開いたり、学校側は個人への支援と学校の多文化理解教育のためにたくさんの努力を傾けてくれた。そのおかげで私は小学2年生まで日本語を習得し、それ以降は何の不自由もない学校生活を送ることができた。

で「手を施すべき存在」であったし、他者が私を見る視線には「韓国」がつきものだったからである。自分が周りの日本人児童とは違った特殊な存在であることを認識した私は、自分自身は日本人ではなく韓国人であり、あくまでも韓国から来た「ゲスト」として日本にただ居住しているのだという感覚に陥るようになる（かといって韓国に帰る考えすらなかったが）。そしてその感覚はほんの数年前までずっと続いていく。

私のアイデンティティ形成過程の一番の特徴と言えるのは、日本社会に馴染むにつれて韓国志向のアイデンティティが浮き彫りになっていったということであろう。しかも、それは日本と韓国が二項対立に置かれる場合に顕著に見られた。ここで、日本での生活を通じて韓国志向のアイデンティティが表面化されたエピソードを一つ紹介しよう。

「真央ちゃんとキム・ヨナとつちを応援するの？」先生の問いに戸惑い

それは、2009年に開かれた世界フィギュアスケート選手権のことである。その頃は日本の浅田真央選手と韓国のキム・ヨナ選手との対決が世界的に注目されていた時期であり、日本は大々的に「打倒・キム・ヨナ」を掲げていた。そのあまりの熱狂さに、異例的に小学校でも世界選手権の中継を見守るようになった。まさか学校のみんなと一緒に韓戦を見守らなければならないなんて、小学4年生のまだ幼い私には大きな負担だった。当時、韓国人としてのアイデンティティを自覚していたに加え、日本での生活が単なる「ゲスト感覚」にすぎなかった私には、日本の選手を応援するいくばくもなかった。正直なところ韓国の選手に勝つて欲しいが、学校中が日本の選手を応援している中、どの立場でどのように振る舞えばいいのかわからなかった。

私の夢・南北統一

2021年韓国籍を放棄、心に大きな穴

しかし、2021年に私の人生とアイデンティティを大きく変えた出来事が起こる。それは、「国籍の取捨選択」だ。日本の国籍法上、二重国籍保持者は22歳に達するまでにどちらか一方の国籍を選択する必要がある。日本籍を選択すべきか韓国籍を選択すべきか。韓国籍というものは好き勝手に変えられるものではないため、選択は慎重に行わなければならない。家族は、国籍の取捨選択で悩む私に対して「国籍などただの法的な決まりに過ぎない。国籍が二つから一つになってもお前が前であることには何も変わらない」と慰めてくれたが、私にとって国籍はかなり大きな意味を持っていた。日本社会に浸透しつつも韓国を志向するアイデンティティを維持してきた私にとって、韓国籍を保持しているという事実は、韓国志向のアイデンティティを掲げるための心強い根拠として機能していた。だが、将来も日本に住み続けるのであれば、外国人として生きるよりも日本人として生きる方が現実的であると考えた。また、家族全員が入っている戸籍から一人だけ出てしまふのは寂しいという親の気持ちも考慮したかった。

と大きな穴が開いたように感じられた。もちろん、今でも韓国人としてのアイデンティティは持ち続けているが、そのアイデンティティを保証してくれるものを失ったという点では、韓国志向のアイデンティティが多少脆弱になったのかもしれない。

本格的に在日コリアンに関心

ところが、国籍選択を終えて喪失感に見舞われていたその時、ふと在日コリアンの存在が頭によぎった。周りに在日コリアンの知人がいるわけでもなかったが、なぜか再日コリアンはいった頭の片隅にある存在だった。当時の私が知っていた在日コリアンの歴史や知識は大学の授業で学んだ程度の浅薄な知識にすぎなかったが、私の経験した出来事と感情には彼らが味わってきた出来事や感情に共通するものがあるのではないかと、また、国籍に限らず様々な障壁に直面させられた彼らの心境は私の悲しみとは比べものにならないのではないかと考えた。そして、そこから本格的に在日コリアンについて関心を持ち始め、在日コリアンに関する文献や論文を通じて彼らの歴史や生き方を深く知るにつれ、一人の人間として彼らの悲惨な歴史に理不尽さや衝撃を覚えるとともに、日本と韓国のハーフとして生まれ、似たような境遇に立つ者として、共感する部分がいくつもあった。特に、長い間議論されている在日コリアンのアイデンティティに関する問題については、私自身も日本と韓国のほしまでアイデンティティに向き合ってきた人間として強い関心と問題意識を持ち、在日社会が今なお直面する諸問題の解決に少しでも貢献したいという思いから、彼らのアイデンティティに関する研究をはじめた。

では、ここから少し研究に関する話をしようと思う。私は現在、東京大学大学院で在日コリアンの研究を行っており、その中でも、今日行われている民族教育と在日コリアン若者世代のアイデンティティ形成の関係性に研究の焦点を当てている。研究テーマの詳細に関してはもう少し語りたいところだが、紙面の都合上、またの機会にお話させていただければ幸いである。

一般的に在日コリアン研究の主体は在日コリアンであるはずだが、私の場合、在日コリアンのアイデンティティに向き合う中で再帰的に自分自身のアイデンティティにも向き合っているという点で、在日コリアンに加えて私自身も研究の主体に立っていると言える。実のところ、ここまで語った私のアイデンティティの変遷過程は、在日コリアンのアイデンティティ研究に着手して以降、つまり、「アイデンティティ」という概念はじめて正面から向き合いはじめて以降に整理できたものであって、過去の私がその都度認識していたものではない。過去の私にとっては自分自身の「アイデンティティ」というものを把握することも、客観的に捉えることも難しかった。何よりも、アイデンティティを形成するベクトルは知らずのうちに動くものであったため、アイデンティティの変遷に追いつけず、把握することは困難なことであった。

では現在、自身のアイデンティティがどのように再構築されたのだろうか。結論から述べると、十数年間日本で暮らしながら内外ともに日本社会に浸透し日本人として生活してきた自分自身の存在を認めはじめ、日本人としてのアイデンティティは徐々に存在感を強めてきている。また、韓国籍がなくなったことで韓国志向のアイデンティティに執着しなくなることにより、周りの日本人と自身を無意識に線引きすることがなくなった。韓国人としてのアイデンティティを強調するため自身における「日本人」としての要素を拒否するには、あまりにも日本語能力や思考、言動、人脈などのあらゆる面で日本社会にすっかり馴染んでいたため、「日本人」としての自分を受け入れるはかなかった。

すなわち、アイデンティティの再構築の流れを整理すると、これ以上韓国志向のアイデンティティに固執しなくなったことで、これまで私の「アイデンティティ」の大枠を色に染めていた「韓国」の色彩が薄まり、水面下で着実に生成されていた「日本人」としてのアイデンティティが水面上に上がっていった。このように、アイデンティティに占める韓国と日本の色彩のコントラストが低まり、それぞれが調和して共存するようになったことで、韓国と日本の両方が自身の母国であるというコスモポリタンの思いが湧いてくるようになった。それだけでなく、自身の経験が在日コリアンと共通することを知ったことで、在日コリアン社会に関わる諸問題を主体的な立場で捉えられるようになった。

私の夢、在日コリアンの南北統一

つまり、私は韓国・日本・在日コリアン社会の三原色が交わる共通部分に立つようになったと表現できる。外部から三つの交わりをただ俯瞰するだけでも、また、どちらかに偏るものもない共通部分に立つことで、韓国と日本と在日コリアン社会の三つが成すトライアングルの展望を自分のこととして論じていくと期待できる。

東京大学大学院人文社会系研究科
韓国朝鮮文化研究室
(韓国朝鮮文化研究専攻)
Department of Korean Studies
Graduate School of Humanities and Sociology
The University of Tokyo